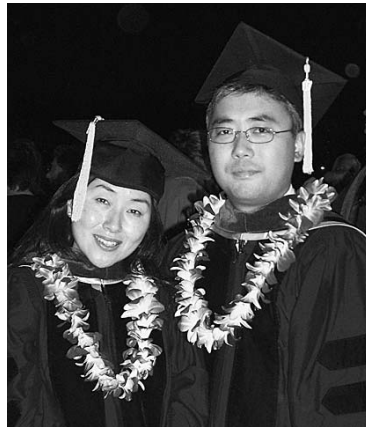


ロードアイランド大学の同僚ならびに
大学院生と。最後列左から2人目が筆者



大学院卒業式にて、同級生・
同僚でもある妻と

らと共に暮らすうち、もう一つの「当たり前」を引いたことに気がついた。先進国となった日本に生まれたことである。地球上のどこに生まれたかということだけでなく歴史とした差。UWCに途上国から来ている学生はその国の富裕層が多いため、こういった差が日常生活で目に付くということとは余りなかったし、南北格差といったも

のは知識として知っていたにすぎない。しかし、実際にインドの旧ボンベイへ友人を訪ねた際に街中のレストランからふと窓の外を見ると、そこには別世界と思えるほどに貧困が露呈していた。信号待ちする車に群がって物を乞うする人々、彼らの身りの粗末さ——窓越しだったのでまるで映画を見ているような錯覚を覚えた。

経済学の面白さに目覚め、途上国の現状を垣間見、そして当時機運が高まっていた持続可能な発展という考え——これらが一緒にあって今の自分がある。

日本の知恵と経験を途上国に、 世界に活かせないか

現在は米国東部にあるロードアイランド大学の准教授として、漁業資源の管理のあり方を経済学の視点から研究している。世界有数の水産物輸入国であり、漁協・漁業協同組合という組織が資源管理の責を担うという欧米にはない構造を持つ国の出身者ということ、日本の沿岸漁業管理のあり方とその応用が現在の主たる研究テーマになっている。日本で漁業者自らによる協同管理がうまくいくのは日本人の和を重んずる気質によると、外国人だけでなく海外にいる日本人の口からもよく聞く。褒め言葉のようにも聞こえるが、この種の論は裏

を返せば日本の例は特異であり、世界各地の過剰漁獲・海洋生物資源の枯渇問題の解決に活用できるものではないと言われているのに等しい。本当にそうなのか——これが研究テーマの出発点となった。

実際に漁村を巡り、漁協で漁師さんたちと話をしていると随分と違った世界が見えてきた。自然を相手に生業を営んでいる漁業者はタフで競争意識も高く、一筋縄ではない者が多い。そのような彼らを擁してなお協同管理が成功している背景・要因は何か。経済学を駆使し、文化的・伝統的要素の下に潜む、漁業経営者にとって普遍的な「何か」を見つけるのが目下のところの目標である。

直接の研究対象は日本の漁業管理だが、首尾よくその普遍的要因を見つけることができれば、先進国・途上国を問わず応用が利く仕組みとなるはずである。漁業資源の枯渇は世界各地で起きており、途上国であるほど人々の生活を直撃し、それが更なる過剰漁獲を招くという悪循環に陥っているところが少なくない。利用者自らの手でその資源を管理し持続的に利用するという日本の経験が、こういった国や地域で活かされるはず。そう信じて、自然資源管理という観点から日本と世界との繋ぎ役を果たせればと思う。

資源管理と日本の知恵を世界へ

UWCアメリカンウエスト・カレッジ留学(一九八九)一年。九六年慶應義塾大学経済学部卒業、旧日本興業銀行入行。二〇〇〇年に退職、アジア経済研究所開発スクールを経て二〇〇六年カリフォルニア大学デービス校農業資源経済学部博士課程修了。同年より現職。

ロードアイランド大学
環境・自然資源経済学部准教授

内田洋嗣

うちだ ひろつぐ

アメリカにあるUWC校を卒業したのが一九九一年。早いもので今年(二〇〇八年)で一七年になる。ここ数年、それまで音信不通だった友人らと電子メール等で近況報告をする機会が増えてきた。先日も卒業後一度も会っていない同級生とテレビ電話で顔を合わせたり。三〇代も半ばを迎え、皆そういう時期に差し掛かっているのだろうか。一七年前と変わらぬ感覚で話すことのできる友人が世界各地にいるというのは、UWCならではの財産と実感している。

経済学が目覚める

UWCに行くまで社会科学系の授業に興味を持ったことは一度もなかった。趣味であった天文は、中学の入学面接試験の先生から「天文じゃ飯を食っていくのは大変」と言われたので早々に諦め、では何にするかと悩みつつUWCへと旅立った。当然、

選択授業は理数系中心となったが、社会系の科目も必修だったのであまり深く考えずに経済学を選んだ。歴史は課題本の数が尋常じゃないと聞かされていたのでそれを避けただけと言えなくもない。八九年、一六歳の時の選択だった。それが一九年後の今、私は資源経済学博士となった。

UWCでの二年間の経験は筆舌に尽くし難い。さまざまな面で刺激を受け、それがあらゆる姿勢となって現在に影響しているのは、これまでの寄稿文が証明している。私の場合、その中の一つがUWCで受けた経済学の授業だった。よく分からないまま需要曲線と供給曲線を板書し、交点が何かの重要な点だというような授業しか知らなかった私にとつて、まず個人の効用というものとの定義から始まり、損得勘定を基礎とする選択行動の集合体としての経済現象という説明は目から鱗が落ちる思いだった。

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四一七名の卒業生を輩出している。

前の晩、キャンパスストアで夜食のラーメンを買うか週末まで待つて単価の安い街中のスーパーで買うか逡巡していた自分の行動を実に明瞭に説明され、愕然としたのを記憶している。もともと理科好きだったので、こういう具合にビシッと説明されることに感嘆し、経済学って面白いじゃないかと思った。結局、進学先も経済学部で、その後回り道を経て資源経済学で博士号を取得するに至ったのだから、あの時の経済学の先生にはしてやられた思いである。

人生の当たりくじ?

もう一つ、今につながるUWC経験がある。私はうちの両親の第一子だが実は私の前に二人いたのだと、何かの折に両親から聞かされたことがある。もし先の二人が順当に成長していれば私はこの世にいなかったかも知れないのかと空恐ろしく思うのと同じに、とてつもない当たりくじを引いた気分だった。

そしてUWCに来てさまざまな国の学生